
失われつつある伝統芸能・親沢の「人形三番叟」

The Vanishing Traditional Performing Art “Ningyo Sanbasou” at Oyazawa

信州短期大学 総合ビジネス学科
Shinshu Junior College

中 藤 保 則
Yasunori Nakafuji

はじめに

宗教的、あるいは伝統的行事をイベントのひとつと捉えれば、長野県はイベントの宝庫である。特に2009年、10年と大イベントが続き、それぞれの地では非常な賑わいをみせた。09年4月5日～5月31日には7年に1度の「善光寺御開帳」(長野市)が行われ、5月には20年に1度の「穂高神社大遷宮祭」(安曇野市)が「穂高人形まつり」と共に斎行された。10年4月2日からは天下の奇祭として知られ、これも7年に1度の「諏訪大社御柱祭」(式年造営御柱大祭)が始まる。また、この稿を書いている3月26日～28日には、これもまた7年目に1度の伊那谷最大の民族芸能祭「飯田お練りまつり」が行われている。

なかでも「善光寺御開帳」と「諏訪大社御柱祭」は、全国的に知られた大祭であり、各地から多くの参詣客を集める。後者はいよいよ祭本番である。モミの木を見定める「見立て」に始まり、フィナーレの「建て御柱」で終わる勇壮な祭は、いよいよ山落としを目前にしており、“御柱”にかける諏訪地方の熱気は、ここ佐久市にいても窺い知ることができるほどである。

しかし、その一方では、長年続いてきた地域の貴重な伝統芸能が、次第に消え去ろうとしている現実もある。この稿の目的はそれらのひとつ長野県南佐久郡小海町に伝わる「親沢の人形三番叟」を紹介することにある。

研究の背景

筆者は余暇学を専門分野としている。余暇学とは聞きなれない名称と思われるが、従来たとえば、余暇社会学、余暇経済学など、既存の学問分野を土台にした切り口から余暇を研究することが一般的であった。しかし、筆者の所属する日本余暇学会では、余暇を正面からとらえて、余暇を研究していこうという意欲を持ち、

余暇学という名称を提唱して、その確立を目指している。

もちろん余暇という語に含まれる範囲は広く、多種多様である。そのなかで筆者は特に歴史的視点に立った余暇の現象に興味を抱いており、そのため「余暇考現学」なるものがあり得るのではないかと提案したこともある。また、レクリエーションも専門分野のひとつで、イベントとの関わりは主としてレク・イベントである。

筆者は平成2年から佐久市岩村田にある信州短期大学に兼任講師として通い始め、平成17年からは専任となって佐久市に居住している。そして、旧中山道が通り、日本最長の千曲川(信濃川)の源流があり、また、鉄道の日本における最高地点があるJR小海線が走る佐久平に興味を抱き、余暇における地域文化、すなわち観光資源としての地域文化を研究してきた。伝統芸能の研究もその一環である。

研究の目的

研究の目的は地域の活性化、地域観光の振興である。佐久平にはなかなか良い観光資源があるのだが、軽井沢を別とすれば大観光地はなく、前述の善光寺のような大寺も、あるいは松本城、上田城などの城、そしてアルプスや上高地のような名高い自然もない。そして観光資源も点在しているだけで、線にも面にもないのである。

ただ、線といえば前述の千曲川、中山道、小海線は線として佐久平を通っており、時代は異なるがその3本の線に沿って文化を形成してきた地であるといえる。それらの線を基に地域文化を再構築する必要があるのではないかと。そして、佐久平は観光地としてよりも、居住型リゾートとして活性化していくべきだろう。それが自分なりに得た一応の結論である。

・研究の方法

地域文化の研究に必要なのは、資料の発掘・収集とフィールドワークである。資料も探してみればなかなか豊富である。また、フィールドワークの最初の手がかりとして、佐久市・佐久市観光協会が実施している「佐久市観光ガイド・佐久の寺院めぐりスタンプオリエンテーリング」をとりあげ、とりあえず掲載された寺院を巡ってみることにした。

佐久は寺社の多い街である。オリエンテーリングの台紙には46の寺院が掲載されている。それらを少しずつ回り、スタンプを捺すのと平行して解説文を読み、興味が惹かれた寺院は文献にあたり調べていった。その途中、著名な神社や文化遺産なども観ることができたし、次第に祭などの情報も得ることができた。ちなみに46寺院のスタンプはすべて捺すことができたので、時々スタンプがきれいに並ぶ台紙を眺めては一人悦に入っている。

祭もなかなか数が多く、離れた地域の祭が日程的に重なることもあって思うように回りきれないが、継続して調査していきたいと考えている。

・研究の結果

1. 200年以上継承されてきた「親沢の人形三番叟」

ある機会に、佐久平の行事や伝統文化をビデオに収め研究している方に、「小海町に200年以上継承されている親沢の人形三番叟というものがあるが、知っているか？」と尋ねられた。初耳であった筆者は、その時、人形(木偶)を使う珍しい三番叟であること、そしてきわめて独特な伝承の仕方など興味深いお話をうかがったのだが、その後、周囲の誰彼に聞いてみても、知っているものはいなかった。ただ一人、小海町の住人で母親が親沢出身という短大総務課の男性が、毎年観ているばかりか、それに深く関わっている方を知っており、すぐその方に連絡して資料を取り寄せてくれた。その資料を提供してくださったのが、井出園達さんである⁽¹⁾。

そして、小海町のすぐ東に位置する南佐久郡北相木村の「三滝山氷まつり」に案内された折り、井出さんの家を訪ね「親沢の人形三番叟」のお話をきくことができた。さらに平成21年4月5日に、筆者が実際に観覧した折りにもお話いただいた。

2. 「式三番(しきさんば)」と「三番叟(さんばそう)」

佐久市湯原の湯原神社では毎年9月に「式三番」が奉納されているが、これは佐久でもよく知られている。では、「式三番」そして「三番叟」とは何だろうか。恐らく歌舞伎通であるか、身近なところでこれらの伝統芸能が継承されている場合を除けば、普段耳にすることもない名称であるだろう。

平凡社『世界大百科事典』によると、三番叟とは「能楽《翁》(式三番)で、千歳の舞・翁の舞に続いて狂言方が担当する役とその舞事(まいごと)」とある。したがって、式三番は能楽の「翁」であり、翁、千歳、三番叟の三役による祭儀的な歌舞で構成され、天下泰平、国土安穩、五穀豊穡を寿ぐものという。そして古来、神聖な曲として他の曲と別種に扱われた。また「叟」とは「翁、細長く痩せた老人、長老」(漢字源)を意味するから、三番叟とは三番目に舞う翁とその舞である。

また、「翁は天下泰平を祝福するのに対し、三番叟は五穀豊穡を祈願するとされ、技法上、足拍子を多用するので、この舞を舞うことを<踏む>ともいう。そこに農耕儀礼にかかわる地固めの意図が介在している。三番叟はまた日本各地の民族芸能や人形芝居のなかにも、さまざまな形態で祝言の舞として残されている」

『親沢の人形三番叟の考察 2001』『親沢の人形三番叟 2005』によれば、「親沢の人形三番叟」は、地元では「さんば」と呼び慣らわされてきたし、翁、千代、丈、三体の舞が舞われるので、翁、千歳、三番叟の舞が繰り広げられる式三番と全体の内容は同様なものである。能楽では、三番叟を含めて「翁」、あるいは「式三番」と呼び、翁を含めた式三番を三番叟とはいわないという。全国的にみれば人形三番叟はいくつか残されているので、このあたりに親沢の人形三番叟の歴史を示唆するものがありそうだと推測されている。

3. 独特で厳格な伝承形式

先に「親沢の人形三番叟」には独特な継承の仕方があると述べたが、独特のみならず、きわめて厳格なもので、昔からの徒弟制度といっても過言ではない。

まず、人形(木偶)を使って舞うのは役者と呼ばれる若者である。役者は同時に弟子とも呼ばれ、親方には絶対服従で一切逆らうことはできない。役者を7年務めると親方になり、次の役者を育てる役目を負うことになる。親方を7年務めると「おじつつあ」となり、親方が役者に正しく指導しているか、伝承が崩れていないか見守り指導する役目を負う。つまり役者としてスタートしてから合計21年間、人形三番叟にかかわる

ことになるのだ。

「おじつつあ」役を終えた後でも三番叟から完全に離れられるわけではない。親方や役者は身内の不幸や出産などがあると役を演じられないしきりになっており、翁、千代、丈、囃し方、それぞれ直系の親方や役者が出役できなくなった時は、降格して役目を果たさなければならない。

この独特で厳格な継承方式が、これまで人形三番叟を継承させてきた最大の要因であろう。第二次世界大戦の間でも、「今年は中止しようか」という話題がでたこともないという。毎年、欠かさず執り行われてきたのである。戦前までは有力な農家を継ぐ数え年15歳から40歳までの男子が世襲することになっていた。しかし、少子化、あるいは集落を離れる若者が多くなって世襲制度は崩れ、集落全体で支えることになり、そしてやがて役者を担う若者が揃わなくなってきたのである。

井出園達さんは丈を継ぐ家系の長で、自身、3つの役を経験し、現在も人形三番叟の保存と研究に熱意を注いでおられる方で、2人の息子さんも丈を受け継いでいる⁽²⁾。

4. 「親沢の人形三番叟」の起源

長い歴史を誇る「親沢の人形三番叟」であるが、その始まりは明確ではない『小海町志』によると、元禄時代(1688~1703)に始まったとあるが、しかし『親沢の人形三番叟 2005』によると、その記録は発見できていないという。後述するが、この三番叟は隣接する川平地区の鹿舞(ししまい)と相前後して対面する舞台で行われており、鹿舞には元禄5年という文字が残されているので、そこからの類推ではないかと見られている。

『三番叟と獅子舞の比較考察 2001』には、「起源は一般に天明3年(1783)と謂われているが八男丸氏の謡本に記入の年代で、人形の衣類にある墨書等によりこれより古く、元禄時代より伝わりたる芸能と思われる」とある。『南佐久郡誌(民俗編)』を見ると、「親沢の人形三番叟」の記述はあるが、その起源や歴史については触れられていない。また、慶応2年(1866)頃から休んだことがないという伝承もある。

いずれにしても「親沢の人形三番叟」の始まりは、まだ明確に特定できていないようだ。

5. 足袋が1度で擦り切れる稽古の日々

この「親沢の人形三番叟」は、親沢諏訪神社(大明神)の春の祭礼として、毎年4月3日に行われるのが通例であったが、今は4月最初の日曜日がその日に当てられている。また、明治時代初期までは旧暦の3月3日に舞ったという伝承もある。

祭礼までの10日間前後が稽古期間である。まず、4人の祭礼係が1年毎の持ち回りで決められる。祭礼係は準備から祭礼の終了まで、祭に関するすべてを取り仕切るわけである。

3月23日ころに舞台開きが行われる。蔵にしまわれていた三番叟収納箱より取り出した練習用の木偶等を組み立てる。そしてお神酒をいただきながら練習日程を決定する。稽古は25日から31日まで毎夜2回ずつ行われるが、役者が親方の家に「お願いにあがる」ことから始まる。親方は家に招き入れて酒肴でもてなす。酒肴を出すのは女性の役である。そして稽古場に到着すると、礼儀作法も厳しく、「お願いしやす」と挨拶し、「ありがとうごわした」で終了するまで、役者(弟子)は親方(師匠)に絶対服従なのである。

稽古場には注連縄を張りめぐらすが、その瞬間から「注連」の内は、関係者以外は足を踏み入れてはならない神聖な空間になり、また女人禁制である。役者、親方が揃うと四隅に塩を撒き、木偶に供えられていたお神酒を左掌で受け一気に飲み干すと、稽古が開始される。この儀式は本番も同様である。

木偶は3体、「翁」は最も格式が高く、天下泰平を祈る神である。「千代」は神に仕える人間で、「翁」「丈」が途中でつける白色刷面、黒色刷面を納めた玉手箱を持ち、また、「丈」が舞う最後の鈴の段で「丈」に鈴を渡す役でもある。「丈」も神であり五穀豊穰を祈るが、最も動きが激しく、他の2体の木偶は1人で扱うのに対して、頭・体と足2人で担当する。「千代」は「千歳」から変化したもの、「丈」は「三番叟」の「黒色刷」からの変化とも考えられるという。

最も重いもので4キロあるという木偶を両腕で差し上げて舞うのであるから、相当な重労働である。たちまち汗が噴き出し、足袋は1日で擦り切れるという。その足袋もすべて自前で、夫人や母親が毎日繕い、繕いきれなくなると新しいものに履き替えるのである。

囃し方は「大鼓(おおどう)」1人、「小鼓」4人、「笛」3人の合計8人であるが、役者同様にそれぞれに親方と「おじつつあ」がついて、前の親方から教わった通りに型を崩さないことが求められる。

3月30日前後に「検閲」が行われる。役者だけでは

なく親方も一番緊張する日である。「おじつつあ」が参加して芸能が正しく伝達されているかどうかを検閲するのである。たとえば役者が正しい動きをしていないと、「おじつつあ」はそれを指導している親方を呼んで注意を与えるが、役者を直接指導することはない。

4月2日、舞揃い(ぶっそろい)が行われる。精進潔斎して木偶人形などの装置を本番用に改め、諏訪大明神の舞台で2幕舞う。1幕目は稽古であり親方の指導があるが、2幕目は親方といえども口出しはできなくなる。役者が神になるからである。ここで人間も神になるのだ。

稽古場への差し入れも女性の役である。なかでも自家製の味噌と刻んだフキノトウ、ユズなどを入れた味噌饅頭が定番になっているという。検閲の日は12人の「おじつつあ」が加わるので差し入れもさらに大量になる。

6. 祭礼当日

「親沢の人形三番叟」と「川平の鹿舞」が演じられる舞台は、これも他に例を見ないものである。親沢諏訪神社の本殿と神門の間の平地に約20メートル離れて2つの舞台が東西に向かい合っている。西が親沢舞台と呼ばれ、東を川平舞台と呼ぶ。

観客は東舞台で演じられる「川平の鹿舞」を見物し、それが終わるとぐるりと向きを変えて、西舞台の「親沢の人形三番叟」を観ることになる。前出の『三番叟と獅子舞の比較考察』によると、特にその趣向を凝らすために造られたのではなく、諏訪神社が親沢集落とその東隣の川平集落、双方の鎮守であり、それぞれが奉納舞台として造られたからと考えられているという。

祭礼当日は、笛の音も賑やかに行列をつくって進んできた川平の鹿舞の一行が登ってから、親沢の一行が神社の石段を登り、神門をくぐって本殿に至り、神官に「ご祭礼でやす」と挨拶をしてお神酒をいただく。お神酒を飲んだ瞬間から「神とみなされる」という。そして、西の舞台に待機する。若者頭は東の舞台に待機している「川平の鹿舞」のところへ挨拶に行き、お神酒をいただいて「さあ、始めとごんなんし」と口上を述べる。

午後1時から約90分の「川平の鹿舞」が終了すると、すぐに「親沢の三番叟」が開始される。

「親沢の人形三番叟の演目は、次のようになっている。(前出『三番叟と獅子舞の比較考察』による)。

開幕 諸役登場

1. 序 翁様口上
2. 露払い 千代様の舞
3. 翁の舞 対面 ワカ 翁舞 万歳楽
翁帰り
4. 三番叟 揉みの段 狂言問答 鈴の段
閉幕 三番叟宙返り

内容まで紹介する能力も紙幅もないが、約90分の舞のうち、丈の最後の鈴の段は約30分と一番長く、種を蒔く仕草であるという。五穀豊穰を祈る舞である。

. 考 察

出演者は「怖ろしい祭だ」「やっているときは、これほど辛いものはない」と口をそろえる。だが、毎年舞い続けてきたのである。また、「これに耐えられると、何事にも耐えられる」ともいう。「さんば」は集落の人々に脈々と受け継がれてきた山の民の伝承である。かかわっている人たちは、時には遙か遠い祖先のことを思うのかもしれない。

ある関係者は「受け継いできたものは舞や囃子だけではない。大きな目に見えない愛のようなものだ」と語る。また、地域に家があるごとく、「さんば」があるともいう。そして「引継ぎたいのは芸だけではない」とも。

山に生き、神に祈った山の民の芸能が、200年以上の時空を超えて今に続いているのだ。

. 今後の課題

しかし、「親沢の人形三番叟」の独特の伝承システムはすでに成立しなくなっている。理由はただひとつ、若者の数が減少し続けているからである。親沢地区は南佐久郡小海町でもひときわ山深いところに位置しており、林業が主体の90戸ほどの集落であった。現在では農業が主であり、しかも兼業農家が多いが、交通アクセスの改善もあいまって若者が外へ働きに出るようになった。かつては外へ出て行った人も三番叟には仕事を休んで帰ってきたというが、若者の数の減少自体は如何ともし難いのである。

平成14年、7年ごとの引継ぎの年、木偶4人、囃し方8人、合計12人の役者がついに揃わなくなった。前述のように役者が欠けると親方がその役を演じる仕組みだが、それもいつまで続くか、誰にもわからない。

全国的に見ると、保存会などが形成され、祭を伝承したり、あるいは復興したりしているケースもあるが、

ただ、「親沢の人形三番叟」の場合、特殊な伝承システムがあり、過酷なまでの稽古があり、それも難しいと推察される。

この貴重な伝統芸能が、できる限り長く継続されていて欲しいと願うばかりである。

注

- (1)「親沢の人形三番叟」に関して、井出園達さんに頂いた、あるいはお貸しいただいた資料と、お聞きしたお話によるものが大半である。
- (2)何冊かの『三番叟御手本』が残されているが、継承者が7年目に代わるごとに以前からの御手本を書き写してきたからという。代替わりごとに必ず実施していたかどうかは不明だが、井出園達さんも「昭和四拾九年四月四日 引渡す 丈師 井出園達記す」という奥書のある「三番叟御手本」を手元に保存している。

参考文献

- ・井出園達編集、後藤淑・大谷津早苗監修『親沢の人形三番叟の考察』2001年
- ・後藤淑・大谷津早苗『親沢の人形三番叟』親沢人形三番叟保存会 2005年
- ・井出園達、井出三彦編集、後藤淑・大谷津早苗監修『三番叟と獅子舞の比較考察』小海町教育委員会・小海町文化財調査委員会 2001年
- ・中藤保則『親沢の人形三番叟』信州短期大学紀要第21巻、信州短期大学 2010年